

# 金銅蟠龍文透彫杏葉

小川弘一氏蔵

岐阜県各務原市鵜沼町大伊木舟塚古墳出土 中国六朝時代

縦(本体) 九・七cm 横 一・二cm

現重量 一九九・五g

各部の厚さ 梓金 四・〇mm 文様板 一・二mm

金銅板 〇・五mm 弱鉄座板 二mm弱

飾鋳 全長 一〇・三mm 鋳頭径 三・四mm

鋳頭高 一・八mm 鋳頭間隔約 三mm

〔図版八〕

昨年六月当館へ舟塚古墳(古墳時代後期)出土の杏葉二枚が寄託となった。馬の胸や腰に垂下した垂飾である。二枚とも同じ作りで、心葉形の鉄地金銅張の座板の上に、一は双鳳文を一は蟠龍文をとものに浮彫風に立体観を持たせて透彫した金銅板を重ね、心葉形の金銅製梓金をのせ金銅の飾鋳列でとめたもの。双鳳文杏葉の例は奈良県珠城山三号古墳、伊勢神宮徴古館蔵品、他に出土地不詳のものに似た品がある。蟠龍文杏葉は一匹の渦巻状の龍を画面一ぱいに表わし、空所に忍冬文を散したものである。舟塚のこの二枚の杏葉はすでに岐阜県文化財協会刊『濃飛の文化財』に阿部栄之助氏が紹介済みであるが、渦状の龍を持つ杏葉は珍しいのとまた優作であるので、ここに重ねて紹介する。

この蟠龍文杏葉の龍文は、全体の中央やや下寄りのところから始まる。ここに斜め左上を向いた龍顔があり、頸は一旦垂下のあと後頭部の背後を通して上へ捲上がる。そして梓金の上部の垂下部尖端に至り、ここから左に胴を捲下げて梓金下部へと向かう。梓金下部

に達すると梓沿いに右へ走り、頸下を過ぎたところで上へ捲上がる。腰は右半部の中心よりやや右に偏したところであり、尾はこの位置から右脚の下をくぐって左し、尾先は捲上がった梓金に接して終る。つまり裏返し「の」字形に一捲半しているわけである。前脚は左半分を占め、一本は上に一本は下に折曲げた形で表される。上方の脚はその関節から房毛を下へ垂らし、下方の脚はその爪先を頭に接しさせている。後脚は右半部に置かれる。左脚は梓金側へ坐り形に曲げられた形で表され、爪先は内へ捲込んでいる。右脚は後へけり出した形で上方へ向かって突上げられ、爪先はやはり内へ捲込んでいる。

龍体の背には鱗、腹には蛇腹がそれぞれ細かく刻まれ、各脚にも後側に毛が細かに刻まれている。実に写実的である。両左脚はともに龍体より盛上がって彫られており、顔の各部を示す彫りとともに立体観を強く打出し、その龍の姿体の力強い躍動感を遺憾なく發揮させるに役立つている。この浮彫風手法と躍動感是中国六朝の特色を如実に示すもので、この杏葉が中国六朝の作であることを推測させる。

龍を配した残りの空間には忍冬文が配されている。先づ龍の吐気として口の前方に扇形のものが置かれる。各花弁を一枚一枚浮彫し、その形も開花側面型の本格的パルメットである。左端にも脚の房毛と梓金との間に前記のパルメットを流し形にしたものが配される。風か流水になびいているような流動感のあるものである。右半部では渦巻形の胴の空隙部を埋めて飛雲形のもの、尾の上方にも左端のものと同趣の流し形のものが小さく一つ配されている。これらの忍冬文もよく中国六朝の作風を示している。

一般に古墳時代の馬具や鍔帯金具で、龍文を持つものは相当数あるが、その龍はC字形の向合うものか、Z字形からS字形、首を立てた歩行形が主である。寡聞の私には、舟塚の渦巻状龍は珍しく感じられた。古墳時代のものに渦巻状の龍を求めると、第一に刀の柄頭である龍首環がある。環形の中に龍首を立てたもので、その数は多い。しかしながら環と言う形に制約されて何重もの渦巻きにはなれなかった。次に鍔帯では、熊本県江田船山古墳の鍔板がある。龍首環に近い形でしかも尾を張出している。渦巻いてはいないが、舟塚のものに近づく観がある。わが国の正確な渦巻状の龍としては、冠帽に一例がある。福岡県宮地岳古墳の冠に平板切抜式で鳳凰文と対で表されているものがそれで、そのほか朝鮮半島では、平安南道眞坡里七号墳の日像流雲文透彫金銅冠帽に浅く細い浮彫風の例が見られる。しかし、この時代の渦巻状龍文はこのように少例である。もっとも殷の銅盤にはこの先行形式とみられる例が頻出し、周末戦国には渦巻形の轡鏡板がある。遠く源流をたどれば、本例もこの中国の伝統の流れの中で考えられるべきものであろう。

(鈴木博司)